東京都江戸東京博物館研究報告　第13号　2007年３月
Journal of Edo-Tokyo Studies, NO.13, P.3-10, March, 2007

【報告①】

町割りの形成
－近世初期日本橋と銀座の都市設計を考える－

伊　藤　　毅*

目　次

はじめに
1．「武州豊嶋郡江戸庄図」から読み取れること
2．堀川の類型
3．町割りの具体相
4．地区の性格
結びにかえて

はじめに

近世初期の江戸町における都市計画はおよそ次のように理解されてきた。すなわち、日比谷入江が埋め立てられ、日本橋・銀座地区を中心に京間60間の正方形街区が割り出され、街区の中央部には方20間の会所地が設けられた。また本町通りや日本橋通りのメインストリートは微高地上の尾根に沿って通され、その方向は富士山や江戸城などのヴィスタと密接な関係にあった、と。

こうした通説に対して、一定の修正が必要となる研究があらわれ始めている。本報告では近年の研究成果に学びつつ、日本橋や銀座などの初期江戸町の性格について少し別の観点から再考したい。

1．「武州豊嶋郡江戸庄図」から読み取れること

江戸の近世初頭の状況を知ることができる最古の古地図は、寛永期に作成されたと推定されている「武州豊嶋郡江戸庄図」である。ここから読み取れる江戸町の形態上の性格は次のようである。

①下町地区は数多くの堀川によって島状に分節されているとともに、堀川は地区間をバイパ

*東京大学大学院工学系研究科建築学専攻教授

ス状に結節している。

②日本橋通りは上記の島状の地区を串刺しするように通されている。日本橋通りはいわゆる「通し丁目」によるナンバリングされた町名（1丁目、2丁目、…）をもつのに対して、それに直交する横町には個別的な町名がみられ、その多くは同業者が集住する職人町であった（図1）。

③八丁堀周辺のピア状の船入堀は、日本橋の町割りと密接に連動している。

④街区中央の会所地は決して画一的ではなく、地区による偏在や形態上のバリエーションがある。

2．堀川の類型

このなかで堀川について詳しくみると、そこにはいくつかの類型があることがわかる。

(a)バイパスとなる交通連結機能（道三堀など）。

図1　寛永期江戸町（『図集　日本都市史』東京大学出版会　1993）

(b)江戸城外郭となる防御機能（外堀など）。

(c)地区を括り出す堀留・境界機能（日本橋川など）。

(d)埠頭となる港湾機能（船入堀など）。

(e)都市内を縦横に結ぶネットワーク機能（紅葉川、楓川など）、これにそって河岸地が数多く分布する。

こうした多様な機能を担う堀川によって江戸の下町は織り上げられていた。鈴木理生氏によると、堀川の開削過程は次のような変遷を経た（『江戸の都市計画』三省堂、1988年）。そのプロセスは上記の類型とよく対応する。すなわち、天正18年（1590）江戸入りした徳川家康は日比谷入江と江戸湊をつなぐ道三堀を開削し、平川河口の付け替えを行う。さらに塩の産地、行徳に直接つながる小名木川を開削するが、これらはいずれも上記(a)の堀川のバイパス機能をになったものであった。

ついで慶長10～13年（1605～08）、江戸幕府成立後に江戸城第一次天下普請が行われ、この時江戸城の外郭となる外堀・汐留川が開削された(b)。旧石神井川の流路が変更され、東西の堀留川が整備される(c)。そして一大土木事業であった日比谷入江の埋立が実行される。

慶長16～19年（1611～14）には第二次天下普請が着手され、京橋川を含む船入堀の開削や、八丁堀船入が成立する(d)。そして楓川や三十間堀の整備が進められることになる(e)。

以上のように、江戸町の堀川は段階をおって整備が進んだのであって、それは基盤的な水上交通からスタートし、やがて町人地の割り出し、さらには江戸町全域を縦横に結ぶ都市内水上交通ネットワークの形成という推移をたどったのである。

3．町割りの具体相

土木史の観点から江戸町の初期都市計画について検討した注目すべき研究が近年登場した（阿部貴弘『近世城下町大坂、江戸の町人地における城下町設計の論理』2005年度東京大学学位請求論文）。

江戸町の微地形および街区寸法、街路交差角などを詳細に分析したうえで、阿部氏は次のような結論を導くことに成功する。

①京間60間の正方形街区が分布するのは、本町・本石町通りと日本橋通りの交差点周辺、龍閑川北の日本橋通り沿い、浜町川西側、以上の３地区にのみ偏在する（図２）。それ以外は、街区寸法が60間ぴったりでなかったり、街区角が90度にならない。

②微地形をみると、本町通りよりは１本北の本石町通りがもっとも高い位置に走っており、浅草橋との関係からみても城下町建設以前は、本石町通りが先行する道路であった可能性がある。本町通りはおそらく江戸城の大手門との関係で整備されたもので、東に行くほど強引に浅草橋側に曲げられていることが明らかである。このことは道路交差角に顕著にあ

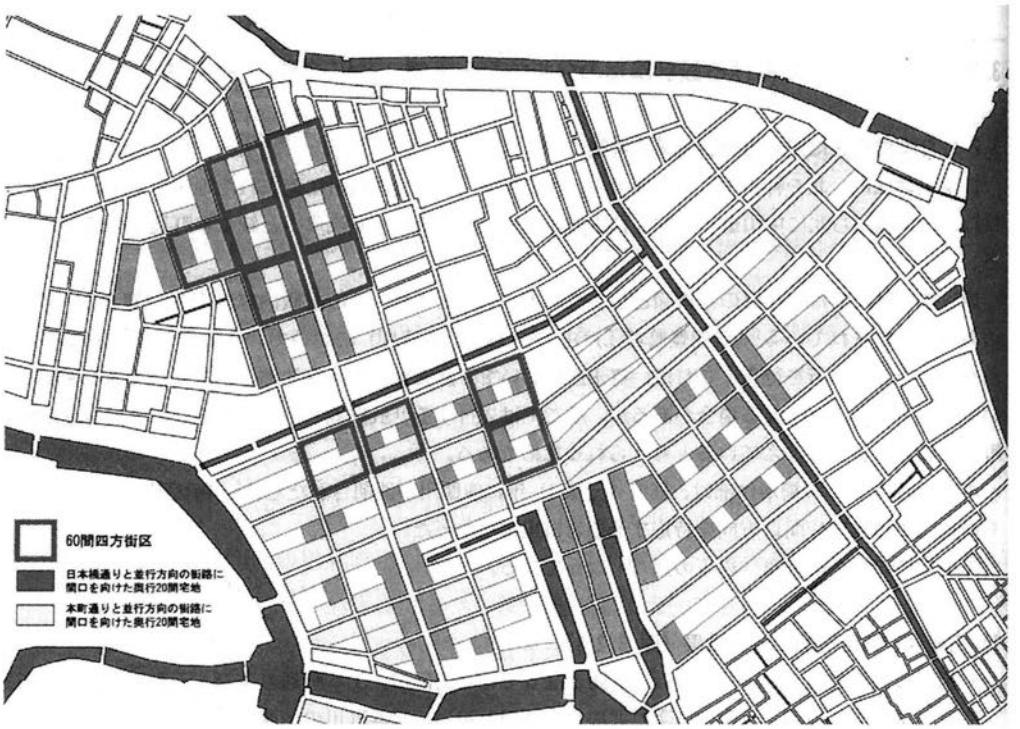

図2　60間四方の街区（前掲、阿部論文）

らわれている。

③日本橋通りと本町通り、本石町通りの交差角は87度で、３度の振れが認められる。これは日本橋通りと中山道入り口とを直接連結するためのものであると推測される（図３）。

④京橋地区は微高地の尾根上に日本橋通りが走り、街路の交差角も90度と整然とした町割りが認められる。また東側には各街区に船入堀が整然と貫入し、水路と街区のセット開発の実態をみることができる。

⑤銀座地区は日本橋通りの通り方、街路交差角ともに上記の京橋地区と同じであるが、端部は不整形な街区が目立つ。ここでは正方形街区の割り出しよりも、掘割とくに三十間堀の開削が優先されたとみられる。また日本橋通りとその裏側のヒエラルキーが顕著である。

⑥会所地の形態はさまざまで、地区ごとの性格が認められる（図４）。

以上のように、阿部氏は従来均質な町割りが施行されたと考えられがちな江戸の下町には、微地形や水系などのさまざまな先行条件に拘束されながら、多様な都市設計が行われたことを発見したのである。

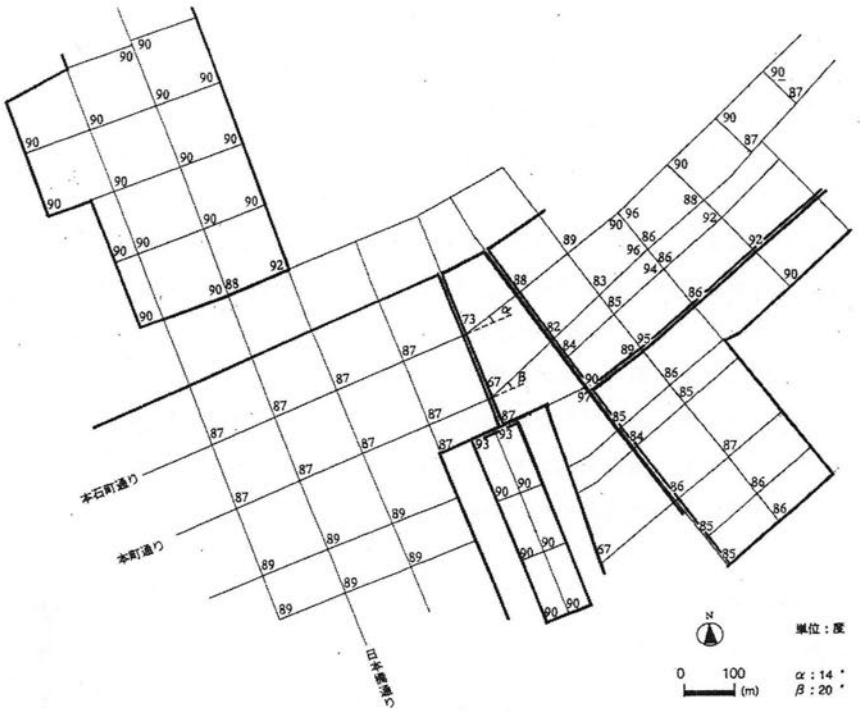

図3　日本橋街区交差角（前掲、阿部論文）

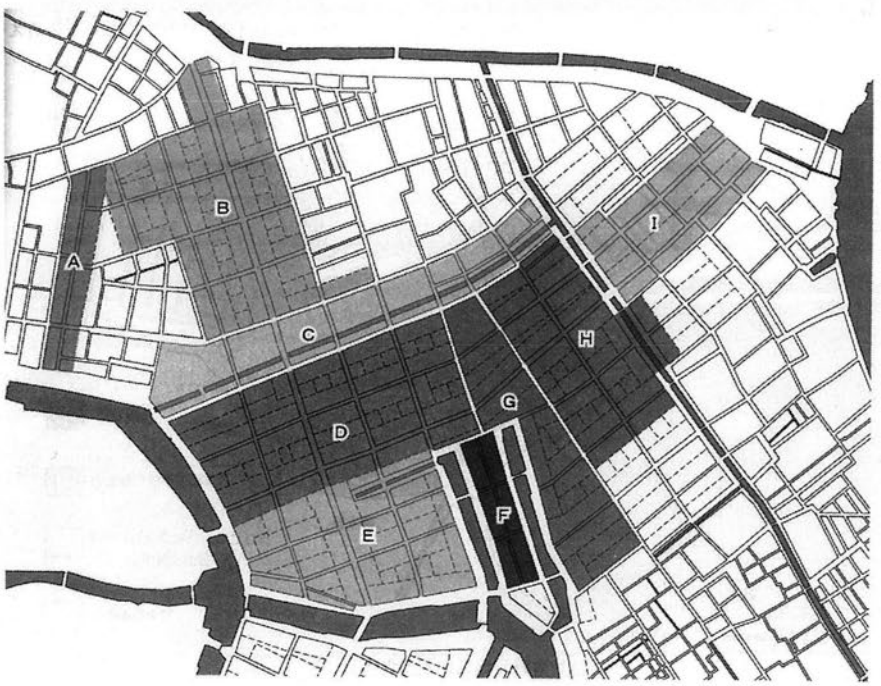

図4　日本橋設計単位（前掲、阿部論文）

4．地区の性格

吉田伸之氏は初期の江戸町の性格に関する論考のなかで、次の諸点を抽出している（吉田伸之「近世前期、江戸町人地・内・地域の分節構造」『東アジア近世都市における社会的結合』清文堂出版、2005年）。

①堀川によって囲まれた地区の独立性とそれらを串刺しにする日本橋通りの構成。東海道・中山道とつながる広域交通軸であると同時に、やがて大店が林立することになる江戸町のメインストリート（「宿」機能を内包）。

②日本橋通りに直交する横町における職人町と国役町の存在（三浦俊明「江戸城下町の成立過程－国役負担関係を通してみた町の成立について」『日本歴史』172、1962年）。

③埠頭としての船入堀、物資荷揚場としての河岸、ストックヤードとしての材木町などの存在からみて、江戸下町は港町としての側面を有し、全体として「流域都市」的な性格が濃厚であった。

④呉服や青物、油、薪、畳、炭などの日常物資の調達地点であり、「賄」機能の主要な部分を江戸町がになっていた。

⑤日本橋魚市場の存在からみて、江戸下町は市場としての機能があった（図５）。

図５　「東都名所　日本橋魚市」 歌川広重　天保12年カ（1841）　91210153

総じて、初期江戸町は小規模ながらも町人地機能のフルセットが準備されていたことになる。

結びにかえて

堀川の多様な機能、町人地のヒエラルキーと役割分担、決して画一的でない都市形態、そして全体として小規模ながらも町人地機能のフルセットを備えていた江戸町も、やがて変容を遂げてゆく。たとえば1690年に行われた船入堀の埋立は、そのひとつのきっかけとなっただろう。明暦大火後の広小路開発や会所地の宅地化、新道の開通など、江戸はやがて「陸の論理」にされされていくことになる（図６）。初期江戸町がもっていた「港」機能は徐々に衰退していく。

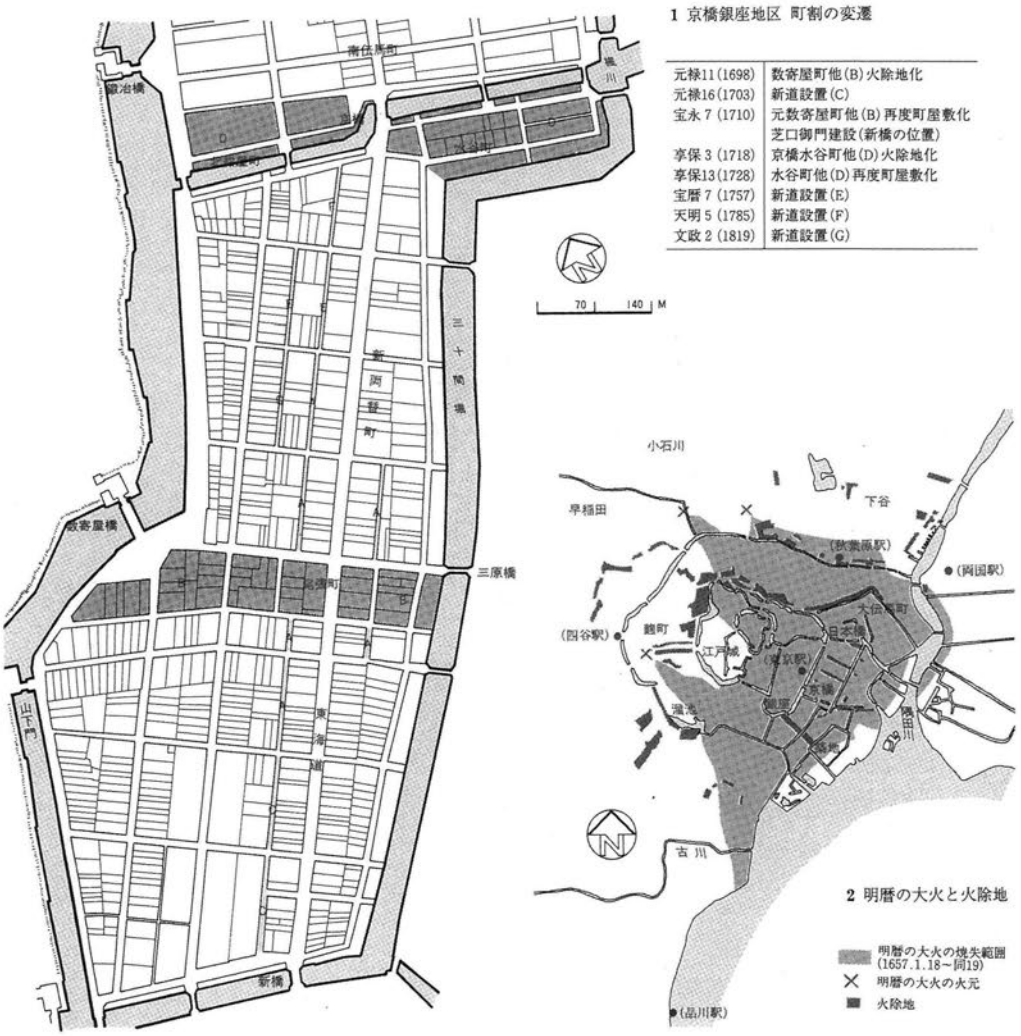

図６　明暦大火後の江戸町（前掲、『図集　日本都市史』）

一方、さまざまな職人の同業者町が展開していた横町地区は近世を通じてその性格を薄めていき、メインストリート沿いの大店と零細町人の住む裏町地区という地域間における経済格差へとシフトする。小規模ながらもある種の全体性を備えていた江戸町は、近世巨大都市江戸の圧倒的な力学のなかに再定位されたのである。